2016 年 12 月 20 日

JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部　No. 37

平成 28 年度中部支部大会報告
―RESOURCE の窮み―

支部長　大森裕實
（愛知県立大学）

平成 28 年度 JACET 中部支部大会（第 32 回／2016）は、愛知県・名古屋市・長久手市の各教育委員会の後援を得て、2016 年 6 月 4 日（土）に愛知県立大学（共催会場校）において予定どおり開催されました。同大学は、2012 年度に延べ 1,800 名の参加者を数えた第 51 回 JACET 国際大会の開催会場として記憶に新しいところです。

目　次

支部長挨拶
大森裕實　1 頁

講演会報告 1
山梨正明 氏「認知言語学から見た英語教育の展望」
今井隆夫　2 頁

講演会報告 2
村田久美子 氏「ELF (English as a lingua franca) 研究の発展と大学英語教育への示唆」
小宮富子　4 頁

学会報告
The 6th Waseda ELF International Workshop
Leah Gilner　5 頁

会員著書紹介 1
『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』
岡戸浩子　6 頁

会員著書紹介 2
『英語デトックス―世界は英語だけじゃない―』
塩澤 正　7 頁

事務局より　8 頁

本大会のテーマは「英語力向上のための多様なリソース活用の新展開」“New Perspectives on Activating a Variety of Resources for Enhancement of English Abilities”に設定し（この場合の「多様なリソース」には、物的リソースも人的リソースも含まれます）、午前の部には、例年どおりの個人研究発表に加えて、将来テキストを編むことを考えている教員・院生向けのワークショップ「教員サイドが求めるTextbookと出版社サイドが求めるTextbook―テキスト出版のKnowhow（準備から出版まで）」（塩澤正・北尾泰幸・三井るり子・朝日英一郎）を新たに企画・実施しました。また、午後の部には、第一Featureの特別講演として、日本認知言語学会及び日本語用論学会の会長職を務めた山梨正明氏（関西外国語大学教授・京都大学名誉教授）が「認知言語学から見た英語教育の展望」と題する講演を行ない、認知言語学の要諦について“談話の名手”という冠名にふさわしい軽妙な語り口で聴衆を魅了しました。また、第二Featureのシンポジウムでは、本大会テーマを真正面から受けとめて、長谷部陽一郎氏（同志社大学准教授）が「オープンデータによる英語構文事例検索システムの可能性―TED Corpus Search Engineを例として」、尾関修治氏（名古屋大学教授）が「コンピュータネットワークを利用した英語学習とリソースの形成」という2つの興味深い話題を提供した後、講演者の山梨正明氏とFacilitatorの小職が加わって、フロアも交えた多角的な合同ディスカッションを展開しました。この内容の一部は、本年度刊行する『JACET 中部支部紀要』第14号（2016.12）に掲載されますので、参加できなかった会員諸氏はそち

らを参照してください。

ところで、本年度の支部大会開催日は、奇しくも、愛知県立大学講堂において「詩人・谷川俊太郎講演会」も開催されました。Humanities の極みにある「詩」の世界と、Science と自認する「言語研究及びその応用」の世界が同じキャンパスの中で一つの宇宙を創り上げたように思われます。週末のひと時、そうした空間が生じたことに幸福感を覚えたのは私だけでしょうか。まさに、ホレーショーよ、“There are more things in Heaven and Earth than are dreamt of in your philosophy” と声高に告げたくなる心境です

最後に、本稿を閉じるに際して、一言申し添えます。大学英語教育学会 (JACET) の個人年会費は現在 9,000 円であり、他の人文系学会と比較して、決して安いとは言えません。また、国際大会（全国大会）に参加すると、別途参加費を納めねばなりません。「その割には会員個人へ還元するところが少ない」と言って退会した人を知っています。なるほど一理あります。しかし、視点を転じてみてください。中部支部の活動だけとってみても、6 月の年次支部大会、10 月の秋季定例研究会、12 月の講演会、2 月の春季定例研究会があり、講演会を除いて、それぞれに研究発表の機会が保証されています。また、年次刊行物の『JACET 中部支部紀要』に論考を発表することも、*Newsletter* に情報発信をすることもできます。会員諸氏がそれらを十二分に活用して、これからの大学英語教育の改善・発展のためにご貢献くださることを切に願います。外国語(英語)教育の究極の目的が人格陶冶に寄与することであるとすれば、それに果敢に挑む会員個々人こそ、本大会テーマに掲げた “人的リソース” に他ならないことを強調しておかねばなりません。

講演会報告 1

2016 年度（第 32 回）中部支部大会

「認知言語学から見た英語教育の展望」

山梨 正明

（関西外国語大学教授、京都大学名誉教授）

2016 年 6 月 4 日

（於：愛知県立大学）

中部支部大会でご講演いただいた山梨正明先生は、Ronald Langacker, George Lakoff と並んで、認知言語学を代表する学者の一人で、生成意味論の時代からこの分野を研究され、認知言語学を切り開き、発展させてこられた。今回は、認知言語学から見た英語教育の展望というテーマでお話いただき、認知言語学の中心的な概念を日本語と英語を例に解説いただいた。さらに、認知言語学者から見た英語教育への展望についてもお話いただいた。今回の講演でも、感じられたことだと思われますが、山梨先生は「学問における交流や教育における交流の場を、まず第一に、人間的な交流の場として、常に明るく楽しいものにしていきたいという気持ちがある」とある書き物の中で語られておられるように、先生の授業や講演に参加させていただいた者の一人として、まさにその通りだと共感しております。

今回の講演の中では、私自身も日ごろから考えていることを多くお聞きすることができ、認知言語学と英語教育を研究しているものとして勇気づけられるものが多くありました。そのいくつかは、次のような点でした。認知とは、人が行っていることであることを考えれば、認知言語学は、人が日ごろ意識することなく行っている当たり前のことをよみがえらせていると言えるということ。そのような認知能力から、言語現象の諸相を説明するのが認知言語学のパ

ラダイムであるから、言語の自然さ、意味の自然さを認知能力からみることが認知言語学の中心となること。このような認知言語学のパラダイムを踏まえ、英語母語話者が持っている世界を把握する傾向性を解明することが、英語教育への展望の１つとして述べられました。具体的には、ネイティブスピーカーがどこに参照点を置き、言語表現する傾向があるかを調べることの重要性が指摘されました。つまり、参照点だけで記号列（言語表現）を作り、意味を伝えることができるわけですが、日本語と英語では、参照点になるものにどのような違いがあるかを明らかにし、メタファー、メトニミー表現が使えないと、母語話者の英語には近づけないということが述べられました。この点は、私もこれまで考えていたことであり、日本語と英語における認知様式の違いを明らかにし、その成果を英語教育に活用していくことは、英語学習のプロセスを楽しく有意味なものにし、英語力の向上に役立つものと考えますので、今回のお話を参考にさせていただき、この分野の研究を進めていきたいと思っています。

また、言語研究の方法に関しても、コーパスを活用した量的な研究だけでなく、言語直感を大事にして、例文を詳細に観察する研究の重要性も語られました。この点も、私も考えていたことなので、勇気づけられました。何が参照点になる傾向があるかといった研究は、コーパスでは拾い難いことを考えれば、直感や母語話者との議論などに基づいた質的な研究とコーパスなどに基づく量的な研究をうまく組み合わせて行っていくことが今後の可能性かと思います。山梨先生の講演では、常に認知言語学の基本概念を鳥の目的な視点から眺めることで、自分自身の研究の立ち位置を見失わないようにすべきだということを感じます。認知言語学の概念、実際の英語表現の観察、そして母語話者との議論に加え、コーパスなどの量的な視点も加えた研究を行うことで、認知言語学から英語教育に貢献できる研究をしていく必要性を感じさせてくれた実りある講演でした。

今井 隆夫（愛知教育大学〔非〕）

● NHK World News で日本の過去・現在・未来を考える総合時事英語
Better Reading, Better Writing with NHK WORLD NEWS
NHK ワールド･ニュースで学ぶ日本と世界の姿 ―多読とライティングでその深層に迫る―
木村 友保／佐藤 雄大／浅井 恭子 著　B5 判　120 ページ　定価（本体 2,000 円＋税）

ビジネス・キャッツ ―プロジェクトで学ぶ実践ビジネス英語―
寺内はじめ 編著　A5 判　208 ページ　定価（本体 1,800 円＋税）
●プロジェクトの企画、立案、プレゼンテーションからクレーム対応までのあらゆるシーンを網羅。
シミュレーションしながら鍛える実践型ビジネス英語の決定版。

南雲堂　〒162-0801　東京都新宿区山吹町 361　TEL：03-3268-2311
E-mail: nanundo@post.email.ne.jp　URL: http://www.nanun-do.co.jp/

講演会報告 2

2016 年度中部支部秋季定例研究会
「ELF (English as a lingua franca) 研究の発展と大学英語教育への示唆」
村田久美子
（早稲田大学 総合科学学術院教授）
2016 年 10 月 22 日
（於：中部大学名古屋キャンパス）

2016 年 10 月 22 日（土）に中部大学名古屋キャンパス（鶴舞）で開催された中部支部秋季定例研究会において、早稲田大学の村田久美子先生による講演会が行われた。講演テーマは「ELF (English as a lingua franca) 研究の発展と大学英語教育への示唆」である。近年、国際英語関連理論への関心が高まっている一方で、「英語の帝国主義化を推進する理論ではないのか」という大いなる誤解が生じたり、二大潮流である WE (World Englishes) と ELF (English as a lingua franca) の相違点が英語関係者の間においても必ずしも理解されていないなどの課題がある。当日の講演では、ELF に焦点を当てつつ、WE と ELF の相違、ELF 理論の変遷、ELF の視点から英語教育を行うことの現代的意義などについて本質的・包括的な議論が展開された。

1990 年代の ELF は「異なった第 1 言語をもつ話者間の英語使用」と定義されていたが、現在では native speaker の英語をも含めて「他に共通したコミュニケーション手段がない時に使用される英語」「コミュニケーションのための唯一の選択肢が英語である時の英語」とされていること、また、Widdowson (2015-3) を引用し、WE の目的が ‘nativized varieties of English as different Englishes’ であるのに対し、ELF の関心が ‘variation (≠ variety) in the use of English as a resource of communication across communities’ にあるとして、WE と ELF の相違が提示された。とりわけ重要と思われたのは、「ELF が英語を pragmatics の視点から見ていること」、つまり、状況の中で変化する英語の「動き」を捉えようとするものだという指摘であり、ELF の研究対象は ‘pragmatics of variation in the use of English among different linguacultural communities’ であるとされる（Widdowson 2015-4）。また、現在の ELF 理論では初期の頃の Lingua Franca Core などへの関心が薄まり、English as a multilingua franca (EMF) へと移行していることも紹介された。ELF の E は ‘trans-languaging’ で ‘super-diversity’ を特徴とし、単なる code switching を超えて、例えば中国語交じりの英語であれば、「どこまでが中国語で、どこからが英語がはっきりしないくらい混ざる現象もみられる」という。「ELF の E には、いろいろな言語が入ってくる」という村田先生の説明をうかがい、「ELF の多言語性」の意味が納得できた思いであった。

ELF はその流動性を特徴とするものであり、大学英語教育に反映される際には、EMI (English Medium Instruction) の形をとることが多いが、CLIL (Content and Language Integrated Learning) との相違は、「EMI が言語学習を明白な目的にしていない」ことであるという。「正しい英語を使うこと」ではなく「英語（混じり）で情報伝達を成立させること」を主眼とする指導法であることになる。参加者との質疑応答の中で、「では規範的な英語使用ができなければ例えば大学入試に合格できない等の事実にどう対処すべきか」が話題となり、「目の前の課題に即した学習も当然必要であろう」という回答がなされた。学習者にとっては規範的な英語使用の学習もやはり必要ということであるが、実際の英語使用場面では、「仮に知っていても」聞き手に合わせて、規範的英語を使わない選択がなされることも多いのが pragmatics であり、その両面をどのように調和させていくかが大学英語教師の課題になるものと思われた。

小宮 富子（岡崎女子大学）

学会報告

The 6th Waseda ELF International Workshop

Leah Gilner
（文京学院大学）

The 6th Waseda ELF International Workshop, hosted by the ELF Research Group Waseda and the JACET ELF-SIG, took place November 11th and 12th at Waseda University. The theme of the workshop was written ELF for academic and business purposes. The first day featured Special Lectures by Professor Maria Kuteeva from Stockholm University and Professor Anna Mauranen from the University of Helsinki. The events on the second day included several individual presentations and a panel discussion.

On the first day, Prof. Kuteeva's talk illustrated how academic writing is shaped by field-specific concerns which novices absorb through contact and interaction with the discourse of more experienced community members. These observations were further corroborated by the interplay of cognitive, microsocial, and macrosocial factors depicted by Prof. Mauranen. These talks made apparent both the impact of input and exposure on shaping communicative practices and the need to adapt writing instruction to the rhetorical conventions and devices that shape academic publication in the range of disciplinary disciplines represented by particular students.

On the second day, the panelists provided stimulating perspectives on processes related to academic writing. Prof. Saori Sadoshima (Waseda University) described how the Waseda University Writing Center, established more than 10 years ago, embraces an inclusive, multilingual approach in training its tutors and advising its visitors. Prof. Tim Stewart (Kyoto University) shared his experiences as an editor on various international journals and his observations on how media and technology appear to be influencing traditional views related to the way academics disseminate information. Prof. James D'Angelo (Chukyo University) imparted insights regarding the integration of ELF-aware perspectives into the management of an academic journal,

毎月配信型 時事英語映像教材
LINGUABOOK × AFP
無料サービス期間中
※2016年4月1日より2017年3月31日まで
Cutting-edge News on Linguabook
㈱成美堂
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22
TEL：03-3291-2261
FAX：03-3293-5490
web@seibido.co.jp

suggesting a delicate balance between preserving writers' voices and maintaining accepted standards.

In its incipient stages, ELF study has focused primarily on spoken interaction. Thus, the workshop provided participants with perspectives worthy of further consideration and empirical study. For further details, including abstracts of individual presentations, please refer to the worshop programme available at the ELF Research Group Waseda website. (URL: https://sites.google.com/site/welfrg/home)

会員著書紹介 1

塩澤 正・吉川 寛・倉橋洋子・
小宮富子・下内 充 著
『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』
くろしお出版 2016 年

本書は5名のJACET中部支部所属会員によって執筆された。国際英語論という考え方は日本の英語教育に変化をもたらす可能性を有するものであるとして、この十数年間にわたる国際英語論に関する研究や教育の成果の一部が紹介され、将来に向けての新しい英語教育が提言されていることが本書の特徴である。近年、英語の重要性がますます叫ばれる状況下で、ネイティブスピーカーのように話せなければならないという焦りにも近い意識を持っている日本人英語学習者は少なからずいるのではないだろうか。そこで、著者らは日本人の英語もWorld Englishes（世界諸英語）の一つであると捉えた上で、英語教育をいかに実践していくかについての可能性について論じている。

本書は、7 つの章と 7 つのコラムによって構成されている。第1章から第3章では、国際英語論の理論的背景、国際英語論の視点の必要性、そして国際英語論に基づく英語教育の実践について論じられている。英語の広域化と多様化によって生まれた国際英語論の基本的な考え方である「国際共通語としての英語」と「英語変種間の平等性」は、日本における英語教育に対して有効的な影響を与える可能性が高いとする。そして、そのような視点に立った英語教育における具体的な言語活動例や教えるにあたっての基本的な留意点がここでは示されており、授業を展開していく上で大いに参考となると思われる。第 4 章から第 7 章では、「日本人の英語」の発音・語彙、文法、意思疎通・慣用表現、そして非言語コミュニケーションと行動様式等に関しての分析および考察がなされている。今後、日本人がどのような英語を話すのか、あるいは話していくのかを客観的に考えてみる上できわめて興味深い内容となっている。

グローバル化が進展する状況下では、日本人が様々な場面で、異文化を持つ人々とコミュニケーションを行う機会はさらに増すことが予測され、そのような背景から日本人の英語の能力の向上には大きな関心が寄せられている。著者らが述べているように、日本の多くの英語学習者も「国際英語論」を通して「英語」を捉え直すことによって「自分の英語（ “My English” ）」を世界の現場で使っていくことが重要であり、またその際には「自信」と「態度」が必要となってくる。その意味において、学校教育を中心とした英語教育は大きな役割を果たすと考えられることから、日本の英語教育関係者が効果的に英語を教えるための工夫に加えて、「国際英語論」の視点からも英語をどのように教えていったらよいかを考える上で本書は示唆に富むと言える。

岡戸 浩子（名城大学）

会員著書紹介 2

山本忠行・江田優子ペギー 編
岡戸浩子 他 著
『英語デトックス―世界は英語だけじゃない―』
くろしお出版　2016 年

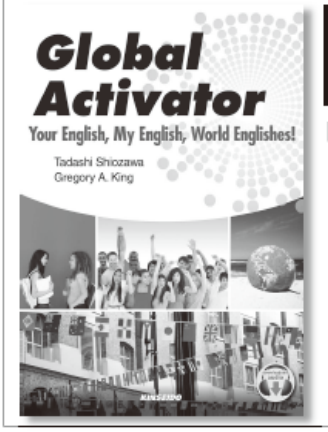
英語との出会いにより「世界への窓」が開かれ、人生が変わったというような人が大学で英語を教えていることが多い。私もその一人である。だが、長く英語教育や国際理解教育の一端を担えば担うほど、日本人がみな英語を学ぶ必要がどこにあるのだろうか、と考えてしまうのは私だけではないはずだ。「英語帝国主義」とまでは言わないが、実質的に英語に異様なまでの価値や特権などが付きまとっていることに気が付かずに、英語を学んだり、教えることの危うさに、英語教育に携わるものは皆、今こそ気づく必要があろう。

つい先日も外務省の主導する学生向けアメリカ研修プロジェクトへの応募用紙に、自分の名前の他に「英語のニックネーム」を記入する欄があり、唖然とした。説明には「日本語の名前は海外の人には読みづらいから」とあった。学生は喜々として自分のニックネームを考えていた。担当職員は「富岡君は Tommy かな」、などと発言していた。このプロジェクトは交換にアメリカからも参加者を募るが、アメリカ人らにも日本名を書かせるのだろうか？ まずありえない。私は「そんなもの書かなくていい！君らのアイデンティティはどこにあるのだ。」と発言した（心の中で）。

この応募用紙を作成したような能天気なお役人に、是非読んでいただきたいのが、この『英語デトックスー世界は英語だけじゃない』である。そのタイトルからも分かるように、英語学習の負の側面も含め、私たちはどのように英語と向き合い、つきあっていくべきかを、海外の豊富な事例などを紹介しながら解説したのが本書である。経験や学識豊かな言語政策や社会言語学の専門家たちが著しただけあり、非常に説得力がある。読み進むほどに日本で「英語の毒」がまん延し、解毒が必要であることに気づかされる。13 名の著者らは数十年後の外国語学習環境まで考え、本気でこのままではまずいと主張している。

全体は 3 部構成で、第 1 部は「英語の毒」はどこに潜んでいるか、第 2 部は英語教育がどうあるべきか、第 3 部には海外に学ぶ英語とのつきあい方、というタイトルがついている。JACET 中部支部からも、岡戸浩子氏が豊富な研究データを元に外国語教育はどうあるべきか、について貴重な提言をしている。丁寧語で一般読者にもわかりやすく控えめに書かれているが、とても鋭い指摘や時には挑戦的な主張が展開され、つい「いいねえ！」と心の中で叫んでしまうような知的刺激の多い楽しい本である。一読を勧めたい。

塩澤 正（中部大学）



Global Activator Your English, My English, World Englishes!
大学生のためのグローバル時代の英会話
「世界の英語」で体感する、グローバル時代のリアルな英会話
ネイティブスピーカーに加えノンネイティブスピーカーのバラエティに富んだ英語を取り入れました。世界の大学生たちの楽しくテンポのよい会話を軸に、リーディングやディスカッションなど多彩なアクティビティを用意しました。
塩澤 正／Gregory A. King 著
本体価格￥2,000　ISBN978-4-7647-4003-7
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21
TEL. 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716
e-mail: text@kinsei-do.co.jp URL: http://www.kinsei-do.co.jp
KINSEIDO 金星堂

事務局より

◆ 2016 年度春季定例研究会のお知らせ

2016 年度春季定例研究会を 2017 年 3 月 4 日（土）に名城大学ナゴヤドーム前キャンパスで行います。

◆ 新入会員のご紹介

2016 年 6 月から 2016 年 11 月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。(敬称略、入会順)

Ebel, Laura（愛知東邦大）、佐々木 裕美（愛知東邦大）、Gray, James（福井大）、Shaffer, Jeffrey（静岡大）、中島 眞吾（中部大）、今井 倫子（愛知大）、西村 洋一（北陸学院大）、西島 淳子（名古屋大・院）、加藤 みゆき（あま市役所）、岡本 直樹（愛知県立大・院）、岡田 美穂子（名古屋大・院）、Thompson, Alan（岐阜聖徳学園大）、Iwaskow, Roman（名古屋外大）、松家 鮎美（岐阜女子大）、吉枝 恵（名古屋外大）、三島 恵理子（中部大）、高橋 妙子（名古屋市立大）

◆ 2016 年度第 2 回 JACET 中部支部総会報告

2016 年 12 月 10 日に開催された第 2 回 JACET 中部支部総会で 2017 年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。

◆ 2017 年度 JACET 国際大会ご案内

第 56 回（2017 年度）国際大会は 2017 年 8 月 29 日（火）～ 31 日（木）に青山学院大学青山キャンパスにて開催されます。大会テーマは以下の通りです。

English in a Globalized World: Exploring Lingua Franca Research and Pedagogy

「グローバル化が進む世界における英語－世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る」

◆ 住所変更届提出のお願い

支部会員のみなさまに、紀要や *Newsletter* などの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET 本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更をご連絡ください。詳細は、以下のサイトをご覧ください。

・JACET 中部支部ホームページ
http://www.jacet-chubu.org/

掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 15 号に掲載用の原稿（学術論文、研究ノート、実践報告、書評）を募集します。奮ってご応募ください。

締切: 2017 年 9 月 10 日
刊行予定: 2017 年 12 月
掲載料: 刷り上がり 1 ページにつき、1,000 円の負担
長さ: 研究論文 23 ページ以内、実践報告・研究ノート 15 ページ以内、書評 5 ページ以内
問合せ: JACET 中部支部事務局

投稿規程など詳細は、ホームページや紀要最終ページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

JACET 中部支部事務局
〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学 佐藤雄大研究室内
E-mail: t-sato@nufs.ac.jp

***JACET-Chubu Newsletter* No. 37**
2016 年 12 月 20 日発行
発行者： 一般社団法人 大学英語教育学会 中部支部 （代表）大森裕實
編集者： 佐藤雄大 北尾泰幸 藤原康弘